

仏教興起の時代と社会的背景

——十六大国考——

宮 坂 宥 勝

只今、学部長先生から大変詳しい御紹介頂きまして、恐縮をしております。駒沢大学の公開講演会に御招き頂き、『仏教興起の時代と社会的背景』のテーマで、とくに、十六大國を初期仏教時代に焦点を合わせながら、どのような経路を辿り十六大國という一つの概念図——そういうインドの國の広がり——が出来上ったのであるかという事をお話させて頂きま

す。
お手元にインドの古代地図と、もう一枚の十六大國の対照表がございますので、それをご覧頂きながら、お話をさせて頂きたいと思ひます。

先程、御紹介頂きました中で『仏教の起源』という書物がございます。が、これは大分、昔に書きました本で、只今、『続・仏教の起源』を準備中ですので、多分、来年中には出版されると思ひます。釈尊時代の状況をみますと、インドの大きな歴史の転換期に遭遇しております、そういう時代、そしてまた仏教が興起した頃の一般社会の情勢を、一応、認識しておく必要があると思ひます。

只今御手元に差し上げた地図は『仏教の起源』の付録になっております、細かい地図でございませうけれど、これをご覧になって頂き、南インドの方は本日のお話にはほとんど関係ございませんので、北インドのガンジス川中流域を中心にその辺をご覧になって頂ければ、と思ひます。

まず最初に十六大國という呼称でございませうが、内外の学者のいうように釈尊以前のある時代の独立国家であると、従来、見られておりますが、果してそうであるか。まず最初にその点を取り上げて検討していきましょう。

仏教興起以前から話を進めてまいりたいと思ひます。ご承知のようにアールヤ民族は西北インドのパンジャブ地方に移住してまいりまして、それから更に東進してガンジス川の上流地域、つまり私共が、クル・パンチャラ (Kuru-Pañcali) と呼んでおります地方に移住します。クル・パンチャラというのは、クル族とパンチャラ族という主要な種族が、その地方に居住していたので、その種族の名前を取りクル・パンチャラ地方の呼んでおります。上流ガンジス川と

ヤムナー川がありますが、両方の川にはさまれた地方ですね。クル族とパンチャーラ族。それから、インドの『マヌ法典』すなわち『マヌ・スムリティ』（Manusmṛiti）には、この地方のことをマディヤデーシャ（Madhyadesa）とも呼んでいることは皆様ご御存じのとおりです。マディヤデーシャというのは、中国地方と言っているのですが、かつてバラモン聖典『ブラーフマナ』（Brahmana）などが編纂された土地でございます。このクル族それからパンチャーラ族というこれらは、最も古い『ウパニシャド』（Upanisad）の中にもすでに出ており、そのところが面白いのであります。

まず、一番古い時代の『ウパニシャド』は、御承知の様に『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャド』（Bṛhadāraṇyaka-upanīśad）とそれから『チャーンドーギヤ・ウパニシャド』（Chāndogya-upanīśad）がありますね。『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャド』はだいたい紀元前八〇〇年頃に成立したといわれております。この『ウパニシャド』の中にいくつかの種族の名前があがっております。その中で最も有力なものとして、クル族とパンチャーラ族がみえます。サンスクリット語のジャナ（jana）は英語では（tribe）と訳してありますが、時には（clan）と訳す事もあります。後者は種族ではなく部族でございます。これはまた、後でお話を進めてまいります。

インドアーリヤ民族がガンジス川の流域をしだいに東進してちょうど仏教が興起した頃にはガンジス川の中流域地方に居住していたわけです。それはインド史などでご存知のことと思います。

その頃、ガンジス川中流域の各地方に、大きな都市が建設されたわけがございます。この都市は場合によっては都市国家と呼ばれておりますが、これは古代ギリシャにおける都市国家の形態とは違います。

仏教が興起した紀元前五世紀頃の状況をまず最初に概観してみますと、マガダという国がございます。これは釈尊当時最も強大な国。それから、やや西の方にコーサラ国がございます。コーサラのすぐ近くにヴァンサという国、それからガンジスの下流域になりますが、アンガとヴァンガという国。それからもう一つ西南インドの方にいきますとアヴンテイーという国。只今申し上げた国名をもう一度繰り返しますとマガダとコーサラとヴァンサと西南インドのアヴァンティー、これは版図が広いのですが、これらの国はラージャヤ（rajya）パーリ語でラッジャ（Rajja）といい君主制の国家をいう。

それから、だいたいガンジス川の北岸地方になりますが、中流域をやや下りますと、ここにヴァッジとあります。それからヴァッジから西北の方向にマッラとあります。このヴァ

ツジとマツラ、それからヴァツジのすぐそば東北方にアングという国がございます。それからもうひとつガンジス川の中流域地方にカーシがあります。カーシというのは現在のベナレス（バーラーナシー）がこれです。カーシは、非アーリヤ系の種族を根幹としておりました種族的な国家でございます。共和制国家で、これはラーシヤに対してサンガ（Saṅgha）と呼んで区別しております。サンガは仏教団体のサンガでございますけれど、仏教が興起した時代には、どういようよな状況であったかと申しますと、様々な種族、つまりジャナ（Jana）とそれから新興諸国家が共存しておる不均等社会であったと私は規定しておるわけでございます。例えば、釈迦族が国を形成しておったかどうかというのは、これは後の『仁王般若経』という経典がございますが、その『仁王般若経』はこれからお話致します十六大国に名前を挙げております。その中に、カピラ国という国がある。カピラというのは御存じの様に釈迦族の本拠地の一つにカピラヴァストゥ（Kapilavastu）というのがございますが、それを中心とした国の名前であります。そういうことから、釈迦族は一つの国を形成しておった、つまり小さい国でございますが、国をもっておったという見方がほとんどであります。これについての検討を加えていきたいと思ひます。

まず種族と呼ばれる人びとについて。釈迦族も勿論そうで

すが、初期仏教の経典を見ますと、このガンジス川の北岸地方には大小いくつかの種族が残存しておったということが分かっております。種族はどういう人びとであるかという本来は政治的には独立しており、経済的には自立している、そういう一つの種族社会というものをつくっておったわけですね。これは仏教の起源をみていく場合に非常に重要なことであると思ひます。では、どういようような種族がおったかと言いますと、釈尊の種族である釈迦族、それから釈迦族と血縁関係にあったコーリヤ族（Koliya）。釈尊のお母さんのご出身のそれです。それから更にマツラ族（Malla）。先程申しました十六大国の中心で国名となっておりますが、本来マツラというのは種族の名前であります。それから更にヴァツジとというのがマツラの東方にある。ヴァツジというのは種族連合であり、釈尊の晩年『大般涅槃経』に出て参りますが、ヴァツジ族の七不退法というのは釈尊によって仏教的に定着しまして、紹介されております。種族連合はリツチャヴィ族（Riṣṭhavi）、これは非常に強大な種族でございます。その他、小さな種族の分散があります。

スッタニパータ（Suttanipata）と呼ばれる最古の経典があります。経集と訳されますが、そのなかに「出家経」という経典がございます。出家とは得度出家の出家ですが、マガダ国王ビンピサーラ王と釈尊が会いまして、そこで討議を行な

った。その時ピンビサーラ王が釈尊に向かつて「あなたは何処の方であるか」という問いに対し、「私は釈迦族の出身である。今は釈迦族はコーサラ国に属してゐる」と述べています。つまり釈迦族の釈尊が既に世に出た頃には釈迦族はコーサラ国に所属しておったことが分かります。つまりもう少し丁寧に申しますと、釈迦族は種族としての勢力を失ない、かなり部族化していつてしまった。部族になりますと、つまり国家の下部組織に組み込まれてしまうから、*clan*と書き、これは *Jana* に対して *clan* という。そのように釈迦族の状況は部族化した政治体制をとつておつたことが分かります。しかしながら種族的色彩が色濃くのこつておるわけですね。チャットパーディヤーヤ (*Chattopadhyaya*) という人は『ローカーヤタ (*Lokāyata*)』という著作を書いた。チャットパーディヤーヤはこういうように述べた。「釈迦族は高度の発達段階に達しておつたが、猶、種族的段階にとどまつておつた」と。その種族的段階は、つまりトライバル・ステージ (*Tribal stage*) と言つております。それで、例えば、釈迦族でも他の種族にしても、実際に国王というものはもつておらなかつた、しかし、ラージャ (*Raja*) という言葉をよく使いますが、ラージャというのはラージャとかサンガと呼ばれました国家の場合の適用ではなく、種族長という意味です。非常に細かい種族社会の状況というものは、元より私

共はよく分かつておりませんが、例えば、サンターガラ (*Santagara*) という公会堂をもつておつたという事が諸文献の中に出ております。サンターガラというのはどういふものであるかという、柱が何本か建つておりました、そしてその柱にわずかに屋根掛けがされております。勿論、壁はないわけですね。そのホールに種族の人々が集まり、長老をリーダーとして極めて民主的な政治が行なわれていたということですね。このサンターガラというのは、話が余談になりますが、講堂という様に漢訳されております。こういう様式が、例えば、仏教の伽藍を建立する場合、講堂というものが作られますが、サンターガラというのは、本来は種族の集会所ということでありました。それから、例えば、リッチャヴィ族というのは非常に強力な種族でございます。この種族は独立した強力な軍勢力と種族的な族制を残しておつた、それが一つの種族連合の形をとりますと、ヴァッジという名前を伝えられて参ります。これは十六大国が、どういふ過程を経て、そういう一つの全体の骨格というものがつくられていくかという場合に、ヴァッジという名前を注意して頂いたらと思います。

それから、釈尊の当時は国家と種族が共存している状態ですが、それでは最も広大な国は何処かといいますと、それはマガダとコーサラという国です。このマガダとコーサラとい

うのはカーシを挟んで絶えず対峙しており、最終的にはマガダによって統一されたようです。コーサラという国名、それからマガダという国名に致しましても、これは初期仏典を見ますというと、必ず複数で呼んでおりますね。というのはやはり、コーサラというのは当時既に国名になっておりましたが、実は本来は種族の名前でコーサラ族があり、その種族社会が滅んだ上に国家が成立したと見ていいわけでございます。それからマガダもそうでございます、必ず複数の呼称になっております。もしも、最初から一つの国というままとまった形態をとっておればそうした呼称は有り得ないわけです。そういうことからしまして、やはりマガダもかつては種族であったということでございます。

大変古い時代ですけれども、トーマス (E. J. Thomas) というヨーロッパの学者が一九三〇年代に書いた初期仏典に関する研究がいくつかありますが、ヴァッジとサーキヤとコーリヤは種族の名前であり、いかなる意味でも国家の名前ではないというように言っております。これはトーマスが最初にそう指摘をしたわけですね。紀元前六世紀頃には、マガダとコーサラ、只今申しましたマガダ族とコーサラ族という有力な種族がありました。これは両者共、種族制から大国に発展したということを非常に簡単な記述であります。そう言っております。

インドのコーサーンビー (D. D. Kosambi) もマガダとコーサラは本来、国家ではなく、いずれも種族の名前であるということを指摘しております。また、私の自論と申しますか、皆さん方にご紹介する前に、外国の諸学者はどういうように見ておるかということを少し紹介してみたいと思います。インドにチャットパーディヤーヤ (D. Chattopadhyaya) という方がおりますが、これは『ローカーヤタ』——ローカーヤタは、ご承知のように唯物論哲学のことを申します——が——という書物を書きました。その中でこういっております。「釈迦族、その他数種乃至、十数の種族、それからまた、森林に生活しておったいくつかの種族が、釈尊当時には散在した」と。仏陀入滅の時の残存種族がどのようなであったかということをもう少し詳しく私の立場で見ていきたいと思えます。それには、皆さんのお手元に差し上げた一枚の表が有ります。まず、所在地と種族名というのがあります。これは只今申しましたが、もう一度申しますと、これはパーリ語でカピラヴァツツ (Kapilavastu) という所でサーキヤ、つまり釈迦族がおった土地です。最も、カピラヴァストゥといいますが二つの場所がございます、インド側では釈尊の仏舎利が発見されたピプラハワールだとい、それから、ネパール側はもう少し西の方に行きますが、ティラウラコットがカピラヴァストゥであると主張しているのはご存知だと思います。私

もしばしばこの二箇所へ行ってみました。どうも、實際土地の人達は、ここでも釈迦族が住んでいた、ここも釈迦族が住んでいたということを言い伝えていきます。時にティラウラコット周辺は、十数箇所もそういう遺跡があるわけですね。煉瓦作りの基礎の部分が残り、みんな釈迦族が此処にいたと。これは私はある程度歴史の真実を伝えているんじゃないかと思えます。つまり、たった一個所、カピラヴァストウという所だけに住んでいたわけではなく、それぞれの氏族が交互に分散して集落をつくっておったというのが実情ではないかと、私の想像ですが、そう見ておられます。カピラヴァストウ、つまり迦比羅城は釈尊が青年時代まで過ごされた所です。

その次に、二番目にパーヴァー (Pāvā) というのがございます。パーヴァーはマツラ族の後に強勢な国家を建設致しますが、釈尊当時、マツラ族という種族でございました。

それから三番目のクシナーラー (Kusināra) にもマツラ族がいた。マツラ族はだからパーヴァーとクシナーラーの二つに分かれておりますが、クシナーラーのマツラ族の人びとはご承知のように、釈尊が晩年八〇歳でクシナーラーの森で入滅されます。その時、荼毘に付し、釈尊の遺骨の分配のお世話までもしたのはマツラ族の人びとでございます。カピラヴァストウの東に当るクシナーラー、それから東南のパーヴァ

ーがでございます。何故、そんなに丁寧に釈尊の荼毘のお世話をしたかということ、私は大部分この地方の人々は、コーリヤ族と釈迦族との血縁関係にあったからだと思います。族外婚は古い種族社会——今でも未開社会の場合にそうですが——において必ずその種族または部族以外の人びとと婚姻関係を結んでいます。これは私の想像ですが、マツラ族の人びとも、やはり、釈迦族とは種族的な血縁関係にあったのではないかと思えます。これは今日の本題でございまして十六大国の大国とは中国で訳された言葉ですが、インドの言葉ではジャナパダ (Janapada) です。ジャナパダを大国と訳したのです。ジャナは種族、それからパダは足という意味がありますが、立っている所つまりその土地で、種族が住んでいる土地のこととでございます。ですからジャナという言葉で血縁的な関係が表され、パダという言葉で地縁的な関係が表されていきます。それで例えばコーサーンビーはジャナパダというのは種族の人びとが住んでいる所の地域という、そのような意味に解釈しております。ですから、決して、最初から大国という意味があったわけではない。今のマツラ族の場合もそうです。

それから四番目にヴェーサーリー (Vesālī) つまり漢訳経典で毘舍離城というようにいっております。これはリッチャ

ヴィ族の首都として、リッチャヴィ族というのはおそらくモ
ンゴル系の種族で、北方から古い時代にインドに入ってきた
と思われませんが。

五番目のミティラー (Mithila) です。これもガンジス
河の下流の方で北岸地方ですが、ヴィデーハ (Vidaha) と
いう種族の名前が出ております。ヴィデーハはかつて王国を
つくっておりまして、先程述べました『ブリハド・アーラニ
ヤカ・ウパニシャッド』『チャーンドーギヤ・ウパニシャッ
ド』にも、ヴィデーハ王国であるということがみえておりま
すので、これは本来勿論、種族の名前でもありませんが、そ
の王国は、リッチャヴィ族によりまして蚕食され、やがて、
リッチャヴィ族に併合されるという過程を辿って参ります。

それから六番目にラーマガーマ (Rāmagama) というのが
ございます。コーリヤ族がしましてコーリヤ族は先程申しま
したように釈迦族と婚姻関係を結んでおり血縁種族でござい
ます。ラーマガーマのことは、これは釈尊が入滅した後の話
になります。舍利を八等分したのは皆さんよくご存じの通
りですね。『大般涅槃經』に出ております。ラーマガーマに
コーリヤ族の舍利は奉安されて、そこに仏塔が立てられまし
た。このラーマガーマのコーリヤ族の人びとはナーガによつ
て——ナーガは、インドのコブラで、中国では龍と訳されま
す——ラーマガーマの仏塔が守られたと伝承されておるわけ

です。これは私は恐らくコーリヤ族のラーマガーマの人びと
がナーガをトーテムズムとしていた事実を伝えていると推定
しています。古代インドの古いいろいろな釈尊の生涯を表し
た浮彫がございしますが、そのなかにラーマガーマの仏塔とい
うのがあって、やはりナーガが塔を取りまいておるわけす
ね。それで、紀元前三世紀半頃にマウリヤ王朝のアショーカ
王が全インドを統一致します。その時に、ある一箇所に釈尊
の舍利を集めて、そしてもう一度再分配し、八万四千塔がイ
ンド全土に建立されたということが伝承されております。そ
の時に、ラーマガーマの仏舍利を取ろうとしたところ、ナー
ガが守っておって、容易にそれを破壊することが出来なかつ
た。ラーマガーマの仏塔だけは、ついにアショーカ王も手に
入れることが出来なかったというようなことが記録に書かれ
ておるわけで、そのラーマガーマでございします。

それから次に七番目に、アッラカッパ (Allakappa) とい
う所に、これはもう小種族ですので広がっている範囲という
のは定まっておるわけです。そこにいたブリというの是非常
に小さい種族です。このブリ族という人々の名前も初期仏典
の中に出てくるわけです。

それから次にケーサプッタ (Kesaputta) というところに
カーラーマという種族がございします。このカーラーマという
種族の名前を聞けば、釈尊が二十九歳で出家されまして、六

年間苦行された時に就いた修行者の一人はウツダカ・ラーマブッタ (Uddaka Rāmaputta)、もう一人はアーラーラ・カーラーマ (Ajāra Kālama) という人物であったということに思いつかれるでしょう。私は、アーラーラ・カーラーマはやはり、カーラーマ族の出身の人であると思います。それでウツダカ・ラーマブッタのほうは、今日はあまり細かい事は申し上げませんが、私の推定するところでは、リッチャ

ヴィ族の出身であったと思うわけです。いずれも釈尊は種族出身の二人の修業者に就いて苦行をされたわけです。しかし、六年苦行したけれども、その苦行は体を痛めつけただけであって、何も悟りの助けにはならないと伝では伝えられておりますが、その苦行のお陰でついに悟りが開かれたと思うのですけど、ここでたいせつなのは六年苦行の間に就いた二人の釈尊の師が、いずれも種族の出身であったということです。何故苦行者であるウツダカ・ラーマブッタとアーラーラ・カーラーマの二人に就いたかという点、釈尊自信は自分の目指すものが得られなかったと理解されておりますが、この二人の修行者は種族でもあったが、苦行者でもあったという事です。釈尊はご承知のように後に成道されてから、『初転法輪経』などによれば、最初にバーラーナシーにおいて五人の比丘に説いたことが記されていますけれど、極端な苦行主義も極端な享楽主義もいけないということで中道を説

かれた。しかしそれでは何故極端なことがいけないのかと言いますと、種族の二人の修行が、これは呪術の世界と結びつくわけですね。苦行することによって呪術のパワーを身につけるわけであります。そういう種族社会の古い宗教と決別したわけで、二人の苦行者が種族の出身であったことはこの際非常に私は重要な意味をもっていると思います。そのカーラーマ族です。

それからもう一つピッパリヴァナ (Pippalivana) という所にモーリヤ族という種族がおった。このモーリヤ族というのはやはり、小さい種族でございしますが、ただこのモーリヤ族の名前が伝えられますのは、パーリ語で書かれました『大般涅槃経』のみで、漢訳經典にはモーリヤ族の名前は出ておりませんところからして、もう少し傍証がないといけないということが指摘されるむきがありますが、必ずしもそうではないと思います。モーリヤ族の横の線を辿っていきますと右のほうにモーリー (Moli) とあります。モーリーといいますが、これは、ジャイナ教のほうで『バーガヴァティー・ストーラ』 (Bhāgavati-sūtra) という非常に古い文献がございしますが、その中にモーリーとあります。これは後にマウリヤ王朝になるわけです。アシールカ王が第三代、チャンドラグプター一世がマウリヤ王朝の創始者でございしますので、西北インドの地方にアレキサンダー王が侵入してきました時に、種族連合を

編成して果敢にこれを迎え打ったのがチンドラグプター一世で
ございます。一代おき、第三代がアショーカ王でございま
す。マウリヤといひますのは孔雀という意味で、孔雀国で
ございます。本来、釈尊時代には、モーリヤ族という種族であ
ったわけです。種族社会が強大な国によって攻め滅ぼされ
て、その廃虚の上に国家が表れる。これが一つのいい例であ
るかと思ひます。

それから十番目はスンスマラー (Sunsumāra) という所
にバグガ族 (Bhagga) という種族がおる。バグガ族とい
うのは強大な種族でござひます。

その次の所をご覧になつて頂きますと、ヴェータデーパ
(Vehadipa) という場所で、ブラーフマナ族とあります、
ブラーフマナというと非常にアーリヤ的のように感じますけ
れど、そういうような種族の人々がおる。例えばブラフマン
という種族はいかにもアーリヤ系の人のように考えられます
けれど、当時はアーリヤ民族がガンジス河の中流域地方に入
つて参りました、だんだんアーリヤ化してくる過程にあつた
わけですね。最も、アーリヤ的な洗礼を受けたというか、ア
ーリヤ化の丁度、結接点に位置しておつたのが例えばモーリ
ヤ族でござひます。他のブラーフマナという種族の名前で呼
んでおつたのも、非常にアーリヤ化されておつた種族の人び
とであつたらうと。これは勿論、私の一つの推定で申しあげ

ておるわけであります。

それから十二番目のところにマガダがござひますね。マガ
ダは先程、所在地のマガダでござひますが、勿論本来はマガ
ダ族、種族の名前でござひましたが、それが同時に、地名に
なり、後には強大な専制君主国家の名になるわけですけれ
ど、初期仏典を見ますと、勿論、マガダという強大な種族も
おつたわけですけど、そこにはまたティヴァラー (Tivar.
ṭṭi) という種族もおつたということなんです。それから、十六大
国の中のいくつものものが、もっと初期の仏典にもでてくる
わけです。

要するに、十六大国と申しますけれど、最初から釈尊の時
代から一つの呼称で版図があつたわけでないということだ
す。どういふ名前が出てくるかというのを、その表にあげた
わけです。

『アングッタラ・ニカーヤ』の中のいくつかに、つまり『増
支部經典』でござひますが、そこでは釈迦族はすでにコーサ
ラという国に併合されています。マツラ族の人びとのマツラ
というのは、非常に民主的な国家でござひます。それから、
リッチャヴィ族ヴィデーハ族が統一されまして、ヴァッジ、
つまり種族連合の形をとります。

それから、その次のコーサラ族の場合にもコーサラに併合
されます。それからブリ族の場合にはヴァッチャ (Vaccha)

という名前がごぎいます。ヴァツチャはコーサーンビーのことですね。それからその次のカーラーマ族もやはり、コーサラに併属させてしまいます。それから最後に挙げましたティヴァラーです。これはもともとマガダ族ですけれども、マガダという国家として形成されるわけですね。これはまた『アングッタラ・ニカーヤ』にでて参りますが、これをジャイナ教の資料の『バーガヴァティー・ストトラ』と対照してみますと、かなり対応するわけです。それは今、表をご覧になって頂けますれば、お分かりになるかと存じます。ほとんど対応するといつていいと思います。これは仏教が興起した時代が、少なくともマウリヤ朝のアショーカ王以前のある時代の国家、種族、更にすでに共存しておいた国家というものがどの様な国々であったかということを示したものでごぎいます。

表がごぎいますけれど、これは資料としてだけここにあげたわけです。

それからその左の側の表をご覧になって頂きたいと思いますが、ここに、表のずつと左から右のほうにいきませんが、パリー語で書かれました『マハーパリニツバーナ・スッタナタ』(Mahāparinibbāna-s)つまり『大般涅槃経』がごぎいます。釈尊の晩年のことを記録したものです。釈尊が八十歳になりましてマガダの北のラージャガハ(Rājagaha)と

いう所からずつと北のほうにコースをとりまして、パトナ(Patna)に参ります。それからガンジス河を渡ってリッチャヴィ族の版図がごぎいます。ガンジス河の北岸地方に参り、更に、カクッター河を渡り、真西にいけますればカピラヴァツツ、つまり、釈尊の故郷の地ですが、そこに行かれる手前の土地つまりクシナーラーで最後の入滅を迎えられまして、先程申しました様にマツラ族の人びとによって手厚く荼毘に付され、舍利が八等分されてインド各地に分配されたところとここで終わっている内容でごぎいますが、ここにいくつかの種族の名前が挙がっているわけです。それを表にしたわけですね。この時にマガダの国だけは国家でごぎいますが、仲間入りをして、是非釈尊の舍利を分けて頂きたいと申し出たわけです。この事につきましても、マガダは強大な君主国でごぎいますので、威嚇をして釈尊の遺骨を奪っていたといういろいろなエピソードがごぎいますが、これだけが国の名前であります。今は、リッチヴィ族と釈迦族とブリ、それからコーリヤとブラーフマナ、クシナーラーのマツラなど、これで全部で八つあります。その点線の下のところは、ドーナ(Dona)とごぎいますが、ドーナというのは、たまたま舍利を分配した時に、ちよつとくすぶる……マガダの国が入つてまいりましたので多少もめごとがあったわけですね。それを調停致しまして、そうしてうまい具合に分配致しまし

た。その調停にたったのがドーナという者でございます。それから、先程申しましたピッパリヴァナにおりましたモーリヤ族——後のマウリヤ王朝になりますが——このモーリヤ族はちょっと時期が遅くクシナーラーにやって参りましたので舍利が分配された後でした。灰だけを頂いて返ったというようなことがある。それは表に書き添えた形になっております。

順序は違いますが、それからもう一つサンスクリット語で書かれました『大般涅槃經』がございます。それを次に対照してみたいと思います。伝承としての話をします。順序が違ούνですよ。どうして順序が変わってきたかというのは私はよくわかりませんが、何か理由のある事だと思います。

それから、後の方に漢訳された代表的な經典でありまして、一つは『遊行經』、それから『般泥洹經』という非常に古い時代に翻訳された經典がございます。いずれも漢訳ですから難しい音写字を使って表にしております。カッコの中に私のローマナイズしたものを示しております。これは例えば『遊行經』のほうの七番目の所に、摩竭王阿闍世、摩竭とはマガダの国、阿闍世というのはアジャータサットウ (Ajātasattu) ということで、非常にうまく音写がされていると思います。この名前がここに連ねられている。ちょっと奇妙な気がしますが、こういうのは經典が新たに編纂された当時の国

王の名前がそこに書いてあるのだと思います。同じ事情は『般泥洹經』でもそうでありまして、こんなところにアジャータサットウという国王の名前がある。これは勿論ピンビサーラ王の後を継いだ人物です。

それから、その下の表を見て頂きたいと思ひます。が、これは一々詳しく対照してお話すれば、いろいろな問題が出てくると思ひます。右のほうから『バーガヴァティー・スートラ』、これはジャイナ教の文献であります、すでに申しました。専制君主国家に致しても、共和制国家に致しても、そういう国の名前があがっておりますが、また、純然たる種族らしい名前も若干見受けられます。

それからその次の『小義釈』。これは『Cūḷa-niddesa』というパーリ語の文献で、ここでは十六ではなく全部で十二の国名が出ております。これについて少し申し上げなくてはなりません、例えば、八番目にサーガラ (Sāgara)、それから十一番目にヨーナ (Yona) というのがあります。サーガラは既にアレキサンダー大王がインドに侵入してきまして、西北インドの地方でございますが、サーガラというギリシア人の町を植民地として作っておりますが、そういうような名前も入っております。ヨーナというのはイオニアでございます。ギリシアの太守である人達が西北インドに参り、ギリシアの植民地を作りました。イオニアをサンスクリット語で

ヨーナと呼んでおります。

それから、カームボージャ (Kamboja) とありますが、これは今のカンボジアとは違ひまして、西北インドの地方ですね。これは地域をはっきりと限定することができませんが、これらはいずれもギリシア系の植民地でございます。そういうものが入っているということです。

それから最後にもう一つ表がございまして、これは『増支部経典』の中に二カ所十六大国の名がでています。『大品』と『布薩品』とです。両方の順序が多少違っています。

それから八番目の所に、ヴァンガ (Vanga) となつていますが『布薩品』ではヴァンサー (Vansa) になつております。このヴァンガというのは大体現在のベンガル州にあたります。ですからガンジス河の河向うに近い所です。ところが、もう一つの『布薩品』ではヴァンサーという。コーサラの近くにヴァンサーというのがある。

それから十五番目がガンダーラ (Gandhara)。それから十六番目のカームボージャというのはガンダーラの奥の西北インドの北の方ですね。こういう地方が全部含まれておりますから、初期仏教の経典といつてもいろいろな層があり、ここにあげた十六大国もすでにその時代には仏教の伝播地域なのです。それを十六という数にまとめたのはインドの人びとの通念でありまして、ご承知のように満月の十六分の一という

のは新月、だんだんと月が満ちていって満月となります。その満月を十六分の一とするわけです。それは全体が一つのまとまった数で完結しますので勿論南インドの方は含まれておりませんが、仏教が興起した時代の種族を核と致しまして、それがどのような国として形成され、更にそれがどう広がっていったかというのと同時に、仏教が伝播していった地域が非常にうまくオーバーラップしておるといふことですね。これは今日、そこまで詳しく皆さん方に論証的にお話が出来ればいいのですが、時間の関係もあつてそこまで至りませんでした。

要するに、従来言われているように十六大国というのは、釈尊が出世なさる前のインドのある時代の国名というものを十六という数でまとめたんだというのが通説になっておりますが、実際は種族と国家とが共存していた仏教興起の時代から始まり、次第に種族が国家によって蚕食されていく、そうして種族が滅んだ上に国家が建設された非常に激動の時代をふくんでいます。しかも釈尊は釈迦族の出身で、ご承知のように、晩年に釈迦族はコーサラ国に滅ぼされてしまったわけですね。同じ頃、ジャイナ教の開祖のヴァルダマーナ (Vardhamana) も——実際は改革者ですが——パルシュヴァ (Parsva) という人が第二十三世で、二十四世が彼すなわちヴァルダマーナでございます。彼もナータ族という種族の出身

でした。やはり晩年にマガダ国によってナータ族も滅ぼされてしまった。実際、種族が減びるのをこの目で多分見たひとで、奇しくも釈迦族も釈尊の晩年には強大なコーサラ国によって滅亡してしまいます。

本来、釈迦族の種族の人びとは伝統的な宗教をもっており、また、そういう伝統的な宗教を改革したのが釈尊であるというように私はみておるわけです。今日、普遍宗教といわれる仏教が、突如として釈尊によって説かれたというのは到底考えられないことです。ジャイナ教のヴァルダマーナの場合もそうであり、ところが一方、仏教はどうかというと、仏教は釈迦族の種族宗教を改革したのが釈尊です。ですから、他方は伝統的な釈迦族の宗教を忠実に守った者がいてもいいではないかと思いますが、それがおるんです。デーヴァダッタがそうです。デーヴァダッタの教団は釈迦族の宗教を忠実に守りました。玄奘三蔵が『大唐西域記』では過去の三仏のみを信仰して、賢劫仏を信仰していないという、そういうデーヴァダッタ教団が七世紀半になお健在であるということ、を記録しておりますので、要するに、釈尊仏教とデーヴァダッタ仏教という二つの仏教の流れが、かなり後代まで、その伝統が続いたということを申しまして、今日は、釈尊当時の社会状況を申し上げればよかったです、だいたい十六大國を中心に致しまして、どのような状況であったかと、

十六大國という一つの概念図が長い歴史の中で次第に形成されたのである。まして、ある一つの時代に、十六大國というまとまった国家群があったのではないということをお話申し上げたわけです。

これは付け足しになりますが、インドの人びとは時間を空間化することを好むわけであり、ですから、十六大國の中には非常に古い時代の種族の名前がそのまま国名として混入していたり、歴史の層が厚いところの一つの縮図のようなものが十六大國として形成されておるということを皆さん方に申し上げまして、本日の講演を終らせて頂きます。

